一　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

①「大丈夫」という言葉の意味が揺らいでいます。「コーヒーに砂糖をお入れしましょうか？」「大丈夫(だいじょうぶ)です」のように、周囲の人からの申し出を断る言葉としても使われるようになったのです。「それには及(およ)びません。私はいまのままで大丈夫です」という気持ちを「大丈夫です」という一言で表しているわけで、その裏には、従来の「けっこうです」という言い方では相手を傷つけてしまうかも、という不安が隠(かく)れています。相手への配慮(はいりょ)から生まれた使い方なので、共感できるところもあるのですが、私は、できれば一時の流行で終わってほしいと願っています。「大丈夫」という語の持つ独特の頼(たの)もしさや温かさに、「拒否(きょひ)」の色合いは似合わないと思うからです。

「大丈夫」は中国から伝わった言葉ですが、中国語の「丈夫」は「一人前の男子」のこと。それに「大」をつけた「大丈夫」は「立派な男子」という意味です。そんな「丈夫」「大丈夫」の二語を、私たちの先祖は不思議な形で受け入れました。当初は本来の意味で使っていたようですが、[A]、二語とも「※堅固(けんご)だ」「しっかりしている」という意味を担(にな)うようになります。すなわち、現在の「丈夫」という語の意味。おそらく「頑健(がんけん)な男子」のイメージが膨(ふく)らんで、この意味が生まれたのでしょう。

そして、②「大丈夫」はさらなる変化を遂げます。と言っても、辞書で「大丈夫」を引くと「危なげがないこと」とあるので、これだけを見ると「堅固」からさほど変わっていないようにも思えます。でも、実際に私たちが「大丈夫」と言う場面を思ってみてください。風邪(かぜ)気味で出勤する人が、家族に「休んだほうがいいんじゃない？」と言われて「これぐらい大丈夫だよ」。[B]、トラブルが起きた現場の責任者が、会社への電話で「大丈夫です。解決できます」。そんな場面が頭に浮(う)かびます。悪い状況(じょうきょう)に陥(おちい)る可能性があるときに、それを否定する言葉として使われることが多いのです。

否定するのは「堅固な性質」を備えているからでしょうか。[C]、そういうケースもあります。「このビルは耐震(たいしん)建築なので、震度7の地震が起きても大丈夫です」などと言う場合です。でも、先ほど挙げた、風邪気味でも大丈夫、トラブルが起きても大丈夫、というケースでは、大丈夫である根拠(こんきょ)として本当に堅固な性質があるのか、怪(あや)しいものです。おそらく発言のもとにあるのは「たぶん、自分はこの事態を乗り切れるだろう」という[I]であり、それはたいていの場合、「そうであってほしい」という[II]の反映です。

つまり、私たちが「大丈夫」と言うとき、そこで語られているのは、堅固な性質があるという「情報」ではなく、たぶん乗り切れるだろう、頑張って乗り切ろう、という「思い」であることが多いのです。[D]、本当は「大丈夫だと思う」と言うべきなのですが、私たちはそうしません。もっぱら「大丈夫です」「大丈夫だよ」と言い切り、言われた側もそれで心を落ち着かせます。これは、情報と思いの融合(ゆうごう)、日本的に言うならば「ないまぜ」です。

「ないまぜ」は、厳しく言えば、ごまかしです。述べているのが「情報」なのか「思い」なのか、という大切なポイントをぼかしているのですから。「大丈夫」と似た使われ方をする言葉に「平気」がありますが、こちらは、自分の「気」が平穏(へいおん)だと言っているので、聞き手は「この人は主観を言っている」と感じながら聞きます。「大丈夫」は、そこがぼかされているのです。

したがって③「大丈夫」という言葉は、使いようによっては危険です。冬山に登る人が「あの山は軽装でも大丈夫」と言ったり、電気ストーブを使っている人が「少しなら洗濯物(せんたくもの)を乗せ

ても大丈夫だよ」と言ったり。そんな「大丈夫」は聞き手の判断を狂わせます。おそらく、昔もいまもこうした会話は無数におこなわれていて、悪い結果につながっているケースも少なくないと思われます。それは、※肝に銘じておくべきこと。ただ、私たちが山あり谷ありの人生を頑張って生きていく中では、④こうしたないまぜに助けられることが多い、というのも事実なのです。

　たとえば、難病を患っていることがわかった人に対する、医師の「大丈夫。腰を据えて治療すれば治ります」という言葉。失恋して泣く友人に言う「大丈夫。次はもっといい恋が待っているよ」という言葉。冷静な目で見れば、ここにも情報と思いの混合があります。客観的には、そうだとは限らないのですから。でも、こうした場面で「大丈夫だと思う」と言われても、心は癒されません。そして癒されないままだと、うまくいくはずのこともダメになってしまうのです。だから私たちは、人を慰め、励ます際には、あえて「大丈夫」と言い切ります。ときには、自らも呪文のように「大丈夫、大丈夫」と繰り返し、前に歩き出します。

　でも、⑤なぜ、私たちの先祖は、この大切な役割を中国からやって来た「大丈夫」という言葉に託したのか。一つは、そこに「丈夫」という言葉が含まれるからでしょう。「堅固」という意味で日常的に使われている「じょうぶ」という音がそこに響くことで「堅固な性質に守られている」空気が生まれるのです。

　もう一つ、濁点が多いことも見逃せません。多くの日本人にとって、濁点がついている文字の発音は、そうでない発音と比べて、重く強く響くと言われています。擬声語を思ってみても、「コロコロ」より「ゴロゴロ」が重く、「ヒューヒュー」より「ビュービュー」が強い感じですね。「大丈夫」は「だ」で始まって、途中に「じょ」をはさみ、「ぶ」で締めくくる単語。短い中に三つの濁音がバランスよく並んでいて重量感と安定感があり、不安な心を落ち着かせるのです。

　私たち日本人は生まれた直後から、この言葉を繰り返し聞きます。この世に生まれてからの数年間は、⑥何をするのも「冒険」だからです。赤んぼうは日に何度も号泣しますが、そのたびに、そばにいる家族や保育士さんが「大丈夫、大丈夫だよ」と声をかけてくれるのです。そして実際、何事も起きず、自分の心もふつうの状態に戻る。誰もがそういう経験を繰り返し、成長してきたので、信頼する相手の口から出る「大丈夫」は、私たちの心の深いところに響き、傷を癒してくれるのです。

　大きな※挫折や悲しみのせいで生きるのがつらいときも、尊敬する人に「大丈夫、君なら乗り切れる」と言ってもらえれば、一歩ずつ前へ進もう、と思えます。愛する人を失い、未来が見えなくなったときも、親しい人に「大丈夫、私がついている」と言ってもらえれば、生きる気力が湧きます。この日本列島では、数えきれない人々がそうやって支え合ってきたし、これからも支え合っていくでしょう。言ってみれば、私たちは「大丈夫」で支え合う仲間なのです。

（高橋こうじ『日本の言葉の由来を愛おしむ』一部改変）

※（文中のことばの意味）
　堅固　…　しっかりとして、がんじょうなようす。
　肝に銘じて　…　心にしっかりと刻んで。
　挫折　…　途中でだめになること。失敗などして、やる気をなくすこと。

問1 ——線①「『大丈夫』という言葉の意味が揺らいでいます」とありますが、どういうことですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 本来、相手への配慮を表す言葉であるのに、否定の意味合いが色濃くなってきているということ。

イ 本来、頼もしさや温かさがこめられた語であるのに、拒否の言葉として使われるようになってきているということ。

ウ 本来、しっかりしている印象を与える語であるのに、頼りなさを感じる言葉になってきているということ。

エ 本来、堅固さや頑健さを表す言葉であるのに、相手の不安を取り除くための言葉になってきているということ。

問2 [A]～[D]にあてはまることばとして、最もふさわしいものを次の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア だから　イ やがて　ウ もちろん　エ あるいは

問3 ——線②「『大丈夫』はさらなる変化を遂げます」とありますが、変化の末、私たちは「大丈夫」をどのような言葉として使っていると筆者は述べていますか。その部分を文中から三十字以内でぬき出し、はじめと終わりの五字をそれぞれ答えなさい。句読点なども字数に数えます。

問4 [I]・[II]にあてはまることばとして、最もふさわしいものを次の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア 予知　イ 断定　ウ 願望　エ 疑問　オ 推測

問5 ——線③「『大丈夫』という言葉は、使いようによっては危険です」とありますが、なぜですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「大丈夫」と言い切ることによって、相手に正しい情報が伝わらず、結局相手の不安な感情をぬぐうことができないから。

イ 「大丈夫」という言葉を使うことで、その人の主観がぼかされてしまうため、聞き手は相手の本心が分からなくなってしまうから。

ウ 「大丈夫」と自分に言い聞かせることで真実から目をそらすようになり、間違った判断ばかりをしてしまうことになるから。

エ 「大丈夫」という言葉によって語られるのが「情報」なのか「思い」なのか分かりにくいため、聞き手の判断が狂ってしまうから。

問６　――線④「こうしたないまぜに助けられることが多い」とありますが、その具体的な例として**ふさわしくないもの**を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　転んで大泣きをしている幼児に対する、「これくらいのすり傷ならすぐに治るから、大丈夫だよ」という言葉。

イ　幼なじみが遠方へ引っ越（こ）すことで悲しんでいる子どもに対する、「大丈夫、きっとまた会えるよ」という言葉。

ウ　電車の待ち時間にお菓子（かし）をすすめてくれた友人に対する、「お腹（なか）がすいていないので大丈夫です」という言葉。

エ　テストの点数が悪くて落ちこんでいる同級生に対する、「次のテストまでにもっと勉強をすれば大丈夫だから」という言葉。

問７　――線⑤「なぜ、私たちの先祖は、この大切な役割を中国からやって来た『大丈夫』という言葉に託（たく）したのか」について、次の問いに答えなさい。

⑴　「この大切な役割」とは、具体的にどのような役割ですか。「～という役割」につながるように、文中から八字でぬき出しなさい。句読点なども字数に数えます。

⑵　「私たちの先祖」が⑴の役割を『大丈夫』という言葉に託した」のはなぜだと筆者は考えていますか。その理由を二つ、それぞれ文中のことばを使って三十五字以内で答えなさい。句読点なども字数に数えます。

問８　――線⑥「何をするのも『冒険（ぼうけん）』だ」とありますが、どういうことですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　初めて経験することばかりで、不安になったり傷ついたりすることが多いということ。

イ　危険なことにばかり挑戦（ちょうせん）するため、怪我（けが）が絶えない状態であるということ。

ウ　成長するにつれてできることが少しずつ増えていくのが、楽しみだということ。

エ　先の見えないことが多く、身動きがとれなくなってしまうということ。

問９　筆者の考えとして、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　現在、私たちが使っている「大丈夫」は、中国から伝わってきた頃（ころ）の意味と変わってしまっているので、使い方を改めた方がよい。

イ　「大丈夫」という言葉を安易に使うと、周囲に誤解を与える可能性が大きいので、普段（ふだん）から使わないように心がけるべきだ。

ウ　どんなに大変な状況に追いこまれても、私たちは「大丈夫」という言葉で不安な気持ちをごまかしながら、危機を乗り越えてきた。

エ　私たち日本人は、幼い頃から「大丈夫」という言葉によって励まされたり、お互（たが）いに支え合ったりしてきた仲間だと言える。

二　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

小さな町での生活にうんざりしていた佐々羅すずは、大学進学をきっかけに東京で生活を始め、九年が経った。ある日突然、恋人に振られ、職も失ってしまったすずは、仕方なく地元に帰ることにする。母の紹介で郵便局に勤めることになるが、配属されたのは『さよなら郵送課』という『別れの手紙』だけを専門に届けるところだった。仕事にも慣れてきたころ、すずの唯一の家族である母ががんで入院する。今、手術をすれば完治が見込めるが、手術をするためには都心の病院に行かなくてはならない。母は悩んでいた。

午前中の窓口業務を終えて、いつものさよなら郵便の制服に着替える。身だしなみがくずれていないかを、入念にチェックする。肩のほつれ、糸くず、着崩れ、髪型の乱れ。大丈夫、ぜんぶない。

更衣室での準備がすんで、平常通り、出発のあいさつに部室に顔をだす。

「それじゃ、いってきます」

最初に千鶴ちゃん。

「すずさん。配達の成功願ってます。これ、お守りです」

「ありがとう千鶴ちゃん。でもこれ、金運祈願」

「あう……」

泣きだす千鶴ちゃんをなでる。緊張がいくらかほぐれる。そばで笑う新田さんが、続けて言った。

「自分の手紙を自分で届ける配達員は、佐々羅さんが初めてだよ」

「優秀な例になってきますね」

最後は小雨さん。何か言ってくるかと期待して顔を向けるが、本人はパソコンの画面をのぞき、こちらに顔を上げてこなかった。気づかないというより、わざとそうしているみたいだった。まあ、こんなものか。

郵便局を出て、病院へ向かう。

電車に乗って二駅、降りるとすぐに見えてくる。受付けでぎょっとされるが、面会人だという旨を伝えると、しぶしぶ面会許可証をもらえた。確かに私服では通らない格好だが、別れの配達人は直接宛先に渡すのがルールである。無理を通してでも、本人に会わないといけない。

３０２号室の前に立つ。なかは静かだ。呼吸の音、心臓の音さえ聞かれてしまいそうな気がした。

①深呼吸をひとつ、ノックする。数秒の間があって、「はい」と丁寧な返事があった。別人のようだったけど、ちゃんとお母さんの声だった。

ドアを開けて、お母さんがさっそく私の格好に驚く。このひとはベッドに伏せていても、表情はゆたかだ。

「すず、それって」

「仕事の制服。今日は仕事できたから」

というのが表向きの理由で、②本当はこの姿をもう一度、ちゃんと見せようと思っていた。

お母さんがⓐほうけている間に、一気に距離をつめる。肩にかけた郵便袋から封筒を取り、差しだす。

「こんにちは、さよなら郵便の佐々羅です。あなたの別れを、届けにきました」

「……なにそれ？」

「こう言う決まりなの」

少しの間があって、お母さんが答えた。

「手紙って、わたしに？」

「そう。仕事として、手紙を届けにきたの」
お母さんはようやく、封筒を受け取る。裏をのぞき、差出人のところに私の名前があるのを確認し、ⓑ息をのんだのがわかった。
「なんでわたしに？　それに、別れの手紙って……」
「いいから、読んで」
③お願い、と口にする。
私が実の親に書いた、別れの手紙。
同時にそれは、初めて親に書く手紙でもあった。
幼稚園や小学校の宿題で「お母さんいつもありがとう」と書く手紙とはまったく別の、強制されず、自分の意思だけで書いた言葉。どうか、届け。
お母さんは封筒を丁寧にやぶっていく。なかの手紙を抜きだし、私に許可を得るように、一度、目配せをしてくる。うなずき返して、お母さんは手紙に視線を落とす。目の動きを追う。上から下に、ゆっくり流れていく。ああ、読んでいるのだとわかる。
お母さんが視線を動かすのと一緒に、私も自分の手紙を、書いた内容を、思い起こしていく。
これは④別れの手紙だ。
私はお母さんとの別れを書き、そして、自分との別れを書いた。

拝啓、お母さんへ。

東京に行くと家をとびだし、大学に進学した九年前を今でも覚えています。いろんな無理を言って、私はお母さんを説き伏せた気でいました。だけど心のうちでは不安でも、私の意思を尊重してくれていたのだと今ではわかります。

仕事を失い、恋人とも別れて、ボロクズ同然のようになって東京から帰ってきた私を、お母さんは笑いました。すごくムカついたフリをしたけど、本当は少し、ホッとした。九年間も東京にいっておいて、何をしていたのかと、得られたものもなく、帰ってきて恥ずかしくもないのかと、もっと怒られるかと思っていたから。

お母さんの紹介で郵便配達員という、いまの仕事につきました。別れの手紙の配達。最初はとんでもない仕事に就いてしまったと絶望しました。だけど配達先の、いろんなひとと関わっていくうちに、悪くないなと思えてきて。無事に手紙を届けられた※高揚感とか、ああ、こういうのが『やりがい』というのかな、なんて気づいたり。お母さんのいう通り、無駄というものはないのかもしれない。

別れの手紙の配達を通して、年齢や男女問わず、様々なひとを見てきました。そのひとが感じていること、表情の変化、心の動き。そういうのが、つかめるようになってきて。だから⑤私は、お母さんの心情も理解しているつもりです。

お母さんが手術に踏み切らず、ここにい続けるのは、私のため。

面と向かってじゃ、とても言えない。都心へ行き、手術で離れる間さえも、私が一人で生活できているか、気が気でない。心配で仕方がない。

九年間も東京へ離れ、ボロボロになってきた私。もうそんな目に、娘を遭わせたくない。目の届くところにおいておきたい。安全なままでいてほしい。だから手術に踏み切れない。家から病院へ通いながら、私の様子も見ながら、ゆっくり治療していけばいいと思っている。

違っていたらごめんなさい。でも、間違っているとも思えま

せん。
　もしも、ほんの少しでもいまの答えが、お母さんの心を当てていたなら、お願いだからどうか、安心してほしい。あなたの娘は、ここをでていったときの高校生のままでは、もうないと。
　確かに食事もインスタントです。洗濯機だってろくに回せないし、家の鍵だって閉め忘れる。実家に帰ってからの私は、お母さんに甘えっきりでした。家に帰れば当たり前のように食事ができていて、お風呂が沸いていて、明日着るための服が用意されていると思っていました。
　でも、もうやめます。私はお母さんに甘えるのではなくて、甘えてきた分を、これからは支えて返していきたい。料理だって覚えるし、洗濯機も回すし、お風呂だって沸かす。
　甘えるためにそばにいるのではなくて、支えるためにそばにいたい。
　だから無事に帰ってきてほしい。健康になって、元気なお母さんを支えたい。これがいまの私だという姿を見せてあげたい。
　お願いします。私のためではなくて、どうか、自分のための選択を。
　最後に、遅くなってごめんなさい。甘える私は卒業です。

佐々羅すず

　打算も何もない。⑥説得できればと思っていたけど、途中からは本心でずっと書いていた。自分の口からではとても言えないような内容。口にはできない文章。本音。
　遠い時代から、手紙という文化は脈々と続いている。必要のないものが※淘汰されていく世界で、手紙はいつもひとのそばにいた。それは口では語り切れない思いを、普段では口にできない本音を伝えることができるから。ときとして手紙は、語ることよりも⑦大事な意味を持つ。
　ずっと考えていた。別れはさびしさや悲しみをもたらす。だけどそれ以外にも、与えてくれるものがある。その正体は何か。今日、やっとそれがわかった。
　別れがくれるのは［A］だ。
　恋人と別れたとき、その優しさに気づき、新しい夢を見つけるための力だ。
　大好きな親が亡くなったときに、その言葉に支えられながら、再び走りだすための力だ。
　人生の※伴侶を失い、迷っても、それでも生きていこうと誓うための力だ。
　別れがくれるのはそういう力だ。私を心配するお母さんとの別れ。甘えていた自分との別れ。お互いが、［A］をもって踏みだせたらいい。
　読み終えたお母さんは、これまでにないほど静かに、笑った。めったに見ないような表情だった。子どものころ、まだろくに立てずに抱っこされていたとき、この顔を私は見たような気がする。
「ありがとう」
　そっと、お母さんが言った。冷たい水のプールから上がってきたような、すっきりとした声だった。
「悪いけど、お母さんをね、ひとりにしてほしいの。今日は帰ってもらえる？」
「わかった」
　最後に受領カードを渡し、『佐々羅美代子』とサインをもらう。カードをしまい、病室をでた。面会許可証を返し、一度も振り返らず、病院をでる。
　駅へ向かっている途中で、ついに©膝が笑いだした。ずっと

ここまで、緊張していたのだと理解する。両手で膝をおさえ、崩れ落ちそうになるのをなんとかこらえる。

携帯が振動した。新田さんからのメールだった。『配達が終わったら、今日は直帰してもらってかまいません』とあった。正直、とても助かった。このまま次の業務に移れる気がしなかった。

叶うことなら、いますぐ叫びまわりたかった。ああああ！と、気持ちが高ぶって仕方がない。

届いただろうか。

⑧<u>ちゃんと、届いただろうか。</u>

（半田畔『とどけるひと』一部改変）

※（文中のことばの意味）

高揚　…　気持ちが高まり、さかんになること。

淘汰　…　よいものを残し、わるいものやいらないものをのぞくこと。

伴侶　…　いっしょに過ごす仲間。特に、夫婦における相手のこと。

問１　〰〰線ⓐ～ⓒのことばについて、文中における意味として最もふさわしいものを次の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

ⓐ　ほうけている

ア　ぼんやりしている
イ　夢中になっている
ウ　下を向いている
エ　注意がそれている

ⓑ　息をのんだ

ア　ぐっと力を入れた
イ　じっと構えた
ウ　ふっと気をぬいた
エ　はっと驚いた

ⓒ　膝が笑いだした

ア　足元がふらふらし始めた
イ　つかれてすわりたくなった
ウ　うきうきと足取りが軽くなった
エ　足ががくがくふるえだした

問２　――線①「深呼吸をひとつ、ノックする」とありますが、この時の「すず」の気持ちとして、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　別れの手紙を配達する相手がどんな人か分からず不安だが、なんとか仕事をやりとげようとする気持ち。

イ　さよなら郵便の制服を着ていたので、周囲からあやしまれたが、面会許可証を受け取り、ほっとする気持ち。

ウ　別れの手紙をきちんと受け取ってもらえるか心配で緊張しているが、落ち着いて届けようとする気持ち。

エ　自分が書いた手紙を自分自身で届けなければならないので荷が重く、今すぐにでもにげ出したい気持ち。

問３　――線②「本当はこの姿をもう一度、ちゃんと見せようと思っていた」とありますが、なぜですか。その理由として、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　自分はもう立ち直ってきちんと仕事をしているということを、母に分かってほしかったから。

イ　かわいい制服を着て仕事ができているということを、母に自慢（じまん）したかったから。

ウ　優秀な郵便配達員として認められていることを示して、母を喜ばせたかったから。

エ　見た人が驚くような制服を着て仕事をしていることを、母に知っておいてほしかったから。

問４　――線③「お願い、と口にする」とありますが、この時の「すず」の気持ちとして、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　自分の気持ちを初めて素直（すなお）に手紙に書くことができたので、母が喜んでくれることを期待する気持ち。

イ　親に初めて書いた手紙なので気持ちをうまく言葉にできず、母にどう思われても仕方ないと投げやりな気持ち。

ウ　母に初めて書いた手紙なのに別れの手紙となったことが申しわけなく、受け止めてもらえるか不安な気持ち。

エ　実の親に向けて初めて自分の意思で書いた手紙なので、そこにこめた思いが届くようにと祈（いの）るような気持ち。

問５　――線④「別れの手紙」とありますが、どのような「別れ」が書かれたものですか。具体的に示された部分を文中から二つ、十一字と十四字でそれぞれぬき出しなさい。句読点なども字数に数えます。

問６　――線⑤「私は、お母さんの心情も理解しているつもりです」とありますが、「すず」は「お母さんの心情」をどのようなものだと考えていますか。六十字以内で答えなさい。句読点なども字数に数えます。

問７　――線⑥「説得できればと思っていた」とありますが、「すず」はどのようなことを「説得」しようとしていたのですか。十字程度で答えなさい。句読点なども字数に数えます。

問８　――線⑦「大事な意味」とありますが、どのようなことですか。文中のことばを使って、二十字以内で答えなさい。句読点なども字数に数えます。

問９　[A] にあてはまることばとして、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　愛情　　イ　勇気　　ウ　情熱　　エ　自信

問10　――線⑧「ちゃんと、届いただろうか」とありますが、この時の「すず」の気持ちとして、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　手紙を読み終えた母がうれしそうにしてくれていたことを思い出し、自分の思いは母にきちんと伝わったと確信する気持ち。

イ　母はおだやかな表情を見せたが、自分の思いを理解してもらえたのか、母の真意は分からないままで、心細く落ち着かない気持ち。

ウ　母が手紙の内容をどのように受け止めたかは分からないが、手紙を届けるという仕事をやりとげることができ、安心する気持ち。

エ　自分の思いを母に伝えることはできたものの、最後まで母の本音を聞き出すことはできず、自分の無力さに失望する気持ち。

三　次の――線に対応するように、□にひらがなを一字ずつあてはめて、各文を完成させなさい。

① □□□つらくても、最後まであきらめないぞ。

② □□雨が降れば、来週に行います。

③ □□□そんなことはあるまい。

④ まるで夏の□□□あつさだ。

⑤ □□私の家においでください。

四　次の――線のカタカナは漢字に直し、漢字は読みを答えなさい。

① 税金をオサめるのは国民の義務です。

② ダンスのコウエンに行く。

③ 手荷物をアズける。

④ 今月は特に電気のセツヤクを心がけた。

⑤ 彼（かれ）はハクシキだ。

⑥ 城崎（きのさき）温泉は有名な湯治場だ。

⑦ この旅も終着点に至る。

⑧ 図書係を務める。

⑨ 書類を簡易書留で送った。

⑩ 均質な水溶液（すいようえき）をつくる。

これで問題は終わりです。

【解答】

一

問1　イ

問2　A　イ　B　エ　C　ウ　D　ア

問3　悪い状況に～定する言葉

問4　Ⅰ　オ　Ⅱ　ウ

問5　エ

問6　ウ

問7　⑴　人を慰め、励ます（という役割）

⑵　・「堅固」という意味で使われる「丈夫」という言葉が含まれているから。

・三つの濁点（濁音）がバランスよく並んでいることで重量感と安定感があるから。

（三つの濁音をバランスよく含んでいることで、不安な心を落ち着かせるから。）

問8　ア

問9　エ

二

問1　ⓐア　ⓑエ　ⓒエ

問2　ウ

問3　ア

問4　エ

問5　甘えていた自分との別れ　11字

私を心配するお母さんとの別れ　14字

問6　娘が一人で生活できるか心配で、これ以上つらい目に遭わせないためにも、手術をせずに娘のそばで治療していこうというもの。　59字

問7　母が手術を受けること。11字

問8　普段では口にできない本音を伝えること。19字

（口では語り切れない思いを伝えること。18字）

問9　イ

問10　イ

三